ハインリッヒの法則の拡大解釈

ハインリッヒの法則は、災害統計をもとにしたもので「同一種の災害が同一人物に起こる比率は、大事故を１とした場合、中程度の事故が29、微小事故（ヒヤリハット）が300」というもの。

これをもとに「３００件の無傷害事故を一つ一つ潰さないと、１件の重傷害事故はもちろん２９件の軽傷害事故すら防止できない。」、「軽傷・傷害なしの事故を多く摘出して対策をとれば、重傷事故を防ぐことができる。だからヒヤリハット活動が大切である。」といった解釈がなされています。

この解釈は正しいのでしょうか？　1981年に出版されたハインリッヒの下記著書では次のように述べられています。

ハインリッヒ　「産業災害防止論」

H.W.ﾊｲﾝﾘｯﾋ／D.ﾋﾟｰﾀｰｾﾝ／N.ﾙｰｽ著　井上威恭監修　海文堂出版㈱（1981 年）

・我々は１：２９：３００の比率を全く信じ込み、全ての様式の災害に適用できると思い込んでしまっていた。

・全米の安全担当者が、重大な事故が軽度の事故の副産物として減少すると信じて事故の頻度を減少させることに取り組んできた結果、全米の度数率は強度率に比べて大幅に減少し、ある州では 10 年間に度数率が 33%も改善されたが、永久一部労働不能傷害は増加してきている 。

・１：２９：３００の比率は、同一種の災害が同一人物に起こる場合を示している。

◎重傷の原因と軽傷の原因は異なる。

重傷の発生を抑制しようとするならば、それが発生するところ（状態）を予見しなくてはならない。

（重傷と軽傷では災害を発生させる危険源と危険源が作り出す危険状態が全く異なる、ということ。）

上記のことから「ヒヤリハットの摘出を行なって軽傷・傷害なしの小事故をつぶせば重大災害が防止できる」いうのはハインリッヒの法則の拡大解釈に他なりません。ところがこの拡大解釈が世間一般に蔓延して世論となっており、「軽傷・傷害なしの小事故も見逃すな、つぶせ！」と安全管理に余分な仕事を強いています。困ったものです。

（誤解を招かないように申し添えますが、重傷になるものが運がよかったために軽傷・傷害なしで済んだヒヤリハットを摘出してつぶせば、当然のことですが、同一の原因で今後起る可能性のある重大災害は防止できます。また、ヒヤリハット活動自体は、上記の重大災害の芽を摘出する効果とは別に、うまく使うことでヒューマンエラーを少なくすることができる効果的なツールであり、私はヒヤリハット活動を否定しているのではありません。）